

學 生 文 庫

國文學史十講

芳 賀 矢 一 著

酣 燈 社

學 生 文 庫

酣 燈 社

學 生 文 庫

國 文 學 史 十 講

昭和26年1月20日印刷

昭和26年1月25日發行

著 者

芳 賀 矢 一

發 行 者

今 井 仁

東京都千代田區神田鎌倉町6

印 刷 者

小 坂 孟

東京都新宿區市谷加賀町1-12

印 刷 所

大日本印刷株式會社

東京都新宿區市谷加賀町1-12

定 價 9 0 圓

發 行 所

株 式 會 社 酣 燈 社

電話神田(25)894・895・5083

東京都千代田區神田鎌倉町6・振替東京194977番

學 生 文 庫

酣 燈 社

目次

第一講	緒論……………	六
第二講	上古文學の一……………	二五
第三講	上古文學の二……………	四四
第四講	中古文學の一……………	六三
第五講	中古文學の二……………	八
第六講	近古文學の一……………	一一
第七講	近古文學の二……………	一三七
第八講	近世文學の一……………	一五六
第九講	近世文學の二……………	一八六
第十講	現代文學——結論……………	二〇八
あとがき……………	芳賀 檀……………	二三
索引……………		二四

國文學史十講

第一講 緒論

既刊の國文學史—文學の意義—國文學史の目的—國文學の特質—各時代の略説

日本文學史といふ名目は近頃段々人が用ゐるやうになつて、著述も追々現はれて來ました。明治十七八年の頃、史學協會の雜誌に、栗田寛・木村正辭などの先生達が文學史といふ表題で書かれたのを見ましたが、纏まつた書物となつて現はれたのは、三上參次・高津鋏三郎兩君の⁽¹⁾日本文學史が第一です。その後同じ人が少しくそれを簡略にして日本文學小史といふものを書かれ、小中村義象・増田于信の兩君が日本文學史といふものを作られ、其後に大和田建樹君が和文學史といふものを書かれました。其外には鈴木弘恭君の日本文學史略といふものがあり、新保磐次君の中學國文學史、今泉定介君の日本文學小史といふものも出ました。次で大和田建樹君の日本大文學史、佐々政一君の日本文學史要、内海弘藏君の日本文學史、藤岡作太郎君の日本文學史教科書、藤井乙男・高橋龍二君の日本文學史、岡井愼吾君の日本文學史、池邊義象君の日本文學史など追々出て來ました。岡崎遠光君は獨逸留學中、獨文で小さい文學史を書かれました。又文學史といふやうな名が付かぬでも、文學史の一部分の研究はずつ

1 明治二十三年、
金港堂發行。

たいと心掛けて居ります。英人のアストン⁽¹⁾といふ人は、日本語を研究した人でありましたが、此人も先年日本文學史を書きました。大體に於て三上・高津二氏のに據つたものでありますが、更に増補もあり、批評もあつてよく出来て居ります。もとより疵もあります。これは佛文にも翻譯になりました。私の師友フロレンツ博士も近頃獨逸文で日本文學史の起草中であります。外國人までが日本文學史を研究する有様です。我我日本人たるものが之を打棄てゝ置くわけには參りませぬ。さて此文學史といふものに就いて一寸申上げて置かなければならぬことは、文學史といふものには色々範圍があることであります。それはどういふ譯かといふと、文學といふ字の意味の取り方によつて様々の違ひが出て來るのであります。それ故先づ第一に、文學とはどんなものかといふ事を御話致さなければなりません。文學といふ語は支那でも日本でも昔から色々な意味に用ゐられて居ります。これは西洋の「リテラツール」⁽³⁾といふ語も同様で、其用法が種々あります。其用法の種々あることが、文學の定義を與へるのに困難な原因だと、ある西洋の學者はいひました。先刻申した近頃の文學史の中でも、鈴木弘恭さんなどは文章を作る學問といふ意味にとられて居り、小中村・増田兩君の文學史には我國の藝文の歴史、學問全體の意味になつて居ります。茲で私が謂ふ文學は、さう

學全史平安朝
室町時代文藝史
近世文學史
村代良博士の論
倉時代文學新論
佐々政一博士の
近世國文學史
岩城準太郎氏の
明治文學史等が
ある。

1 William George Aston

一七四一—一九一七
A History of Japanese Literature

(日本文學史)は西歷一八九九年(明治三十二年)刊行。明治四十年に芝野六助氏の補筆による邦譯が出た。

2 Karl Floreny

西歷一八六五年生。日本文學史は其後西歷一九〇九年(明治三十八年)完成。ライプチヒで出版。鏑田太郎・土方定一兩氏によるその邦譯が昭和十一年樂浪書院から出た。

3 Literature

いふ意味ではないのです。書かれたもの、即ち製作物を申すのであります。畫師が畫を書いて、其畫が一の美術品であるが如く、文學といふものは、文人によつて作られた製作物であります。歌であるとか、文であるとか、作られた美術品を指して文學といふのであります。巨勢金岡や狩野探幽などの書いた畫と同じく、紀貫之の歌、紫式部の文などは、一種の美術品であります。さういふ様なものを取つて文學といふので、文學は學問全體といふ意味でもなく、文章を作る爲の學問でもない。彫刻に作つた佛像、建築家の建てた殿堂などと同じく、美術眼から見て立派な美術品といふべき歌文をいふのです。吾々の先祖がその思想感情を國語の上に現はして置いたものが立派に美術品に出來て居る、それを國文學と名づけるのであります。國文學の歴史はさういふ美文の歴史だといふ事を御承知下さい。文學史の立て方によつては強ち美文の側ばかりを取らず、すべての書物の中で實用を主とするものだけを省いて、理想を主としたものは悉皆文學として取扱ふといふやり方もあります。即ち詩的の書物ばかりでなく、あまり美文とはいはれぬ學術上の書物等も文學史の中に入れる場合もあります。今茲には稍々狭い意味で美文ばかりを取つて御話するのであります。

文學の歴史に面白い事は、其文學の中には、おのづと其國民の氣風・思想・感情と

いふものが現はれて居ることあります。國民の思想・道德・感情といふものが、其國文學の上に反映されて居る事が大切なのであります。それを取つて吾々が歴史的に研究するのであります。我國民の思想感情を現はし出して居るものを取つて、それを調べて見ることは、即ち我が國民の思想感情の變遷を見る所以であります。國民の性生活を知る所以であります。普通の政治歴史に於て何年何月の何日に、どういふ戰爭があつて、どういふ天子様が位に御即きなすつたといふ様な政治歴史は、唯外形を見るだけでありますが、日本國民がどんな生活をして居つて、どんな境遇に居つたかといふ本當の内面を覗ふには、文學の歴史を知るのが一番宜いのであります。或時代の文學を見れば、其當時に自分の身體を置いて見るも同じことで、當時の人の心にはいり込んで其時代に住んで居るやうな心持になるのであります。我國は太古から建國數千年の久しき、少しも外國の侵略を受けたことがない、萬世一系の天子様を戴いて、千古不易なる國語を話して居ります。漢學や佛學が這入つて來て、漢語・佛語が混つたり、文法上の構造が多少變つたりするのは時勢の變遷で、自然のことです。ありますが、日本語はどこまでも日本語です。かやうに數千年來、代々相續いて日本語を話して來て、其日本語で綴つた文學が今日吾々の手に遺つて居るといふことは、如何に

も貴い幸福なことです。一國の文明は其國民が造出するものであれば、我國民の思想感情の變遷を現した文學史の裏面には、世界に特殊なる我國民の歴史が認められることとあります。文學歴史の必要なことはもとより論を待たぬことでございます。

そればかりではありませぬ、文學といふ様な物は昔からの歴史を研めなければ後の發達が出来ぬものであります。どんな文豪が現はれて來ても、昔からの文學に一わたり通曉してその上に何か新しい機軸を出し、新しい製作をなすものであります。昔からのニューベリーフエレング傳説を根據として立つものであります。唯昔の文學を襲ふばかりでは死んだ文學ですが、さりとて一切昔からの文體趣向を全く顧みないで、新作は出来るものではありませぬ。譬へて見れば草や木などが、滋養を地中から吸つて居つて、花が咲き實を結んで、其根は地の中に隠れてゐる様なものです。古來の傳説や何かを根據として新しい製作が出来るのです。それ故文學史では主として其邊の消息が明かになる様に發達變遷の跡を示さなければならぬものです。新しい文學者がどういふ點に於て新機軸を出したといふことを示すのが必要なのです。今日の文學者が古文學を研究しない、古文學の歴史を知らぬといふことは、文學の發達しない一つの原因に相違ありません。もとより文學者などは天才を待たねばなりません。けれども其天才も昔から

の歴史を知らんでは十分な伎倆を延ばすことは出来ずまい。有名な畫かきなども一わたり昔からの流義を見極める力があつて、新機軸を出すことが出来るのです。昔からの謡曲や戯曲の生立を知らぬ天才では、立派な明治の戯曲が出来ようともしはれませぬ。諸君の如き教育に従事せられる御方に於ては、實際上から文章や歌の作者・時代を知るといふ必要も無論あることです。

さてこの文學史の書き方に就いては色々あります。或は事實を主として作ることがあり或は評論を主として編むことがある。文體をむねと論ずるもあり、思想を主として論ずることもあり、著作物の種類に依つて立てゝ往くこともあり、人物を土臺にすることもあります。この人物を土臺にするといふことは、餘程必要なことであります。なぜかといふに、其作物の中には自ら其作者の人物が現はれるものであつて、人物の境遇變遷は、著しく文學に影響を與へるものでありますからです。例へば憂鬱な人が歌を作れば憂鬱なものが出来、快濶な人が作れば快濶なものが出来るといふわけであります。それ故作者の人物をば輕々しく見ることは出来ぬのであります。非常な文豪が出て來て、非常な秀逸な詩を作りましたならば、當時の人の思想に影響する勢力を持つて來ます。其時代を一變する勢力を持つて來ます。さすれば其人の經歷境遇

は、とりも直さず其社會を變化するものといはねばなりません。これは文學者のみならず、豪傑は必ず社會の產物として、社會に影響せられて生れて來ますが、又其影響によりて時代を動かし、社會を變化します。大文學も時代の爲に造られて時代の思想を文學の上に現はしますが、又箇人としての影響をも時代の上に與へます。それ故文學者といふものゝ經歷境遇即ち傳記といふものは、文學史の上に輕々しく見ることは出來ぬものであります。文學史家の本領としては、餘程大切に文學者の境遇生立を調べて見る必要があります。我國の文學史ともいふべき古い書物は其點の注意が餘程足らぬ様に思ひます。併しながら唯文學者の傳記を並べたばかりでは一つの文學者年表で文學史の名はつけられませぬ。人名辭書と同じ事です。書物の名を並べたばかりならば群書一覽です。書物や學者の名を並べたばかりで文學史の能事は畢りませぬ。其間に十分な關係を持たせる必要があります。人物の傳記を話すのは何の爲に話すか。人物が其時代に於て、どういふ風に生立つて、どういふ風に時代の影響を受けたか。どういふ境遇に立つて、どういふ思想を養つて、後の時代にはどういふ影響を與へたかといふことを見る爲であります。時代の一人物と、人物の一時代とは、相關聯しなければならぬ。此文學時代はかういふ人物に依つて造られた。此文豪

はかういふ時代に成立つた、でかういふ新機軸を出したといふ關係を見て、文學の變つて來た次第其文學の變遷する有様を説明しなければならぬのであります。併しながらこれは本當の文學史の目的とするところであります。自分等の研究は未だ淺薄なものでありますから、到底十分なことを御話することは出來まいといふことは呉々もお斷り申しておきます。且又傳記をお話することは、大分時間を取ります、一人の傳記をお話しても直ぐ一時間位は經ちますから、とても出來ますまいと思ひます。それ故各時代の大要の人物を初めに御話をして、それからあとは有名な著述などの出たものに就いて、ちよいちよいお話をして、其著述に就いて調べるには斯ういふ本を見たら宜からう、或は此作者の傳記を見るには、斯ういふ書物を見たら宜からうといふ注意をお話して置くといふ位に止めようと思ひます。一種變なやり方のやうですが、短時日の講習には却つてこの方が宜からうと信ずるのであります。此講義が若し幾分にも諸君の御利益になれば、私にとつては大きな仕合であります。

我國の文學は神代から始まつて、連綿として今日迄傳はつて居ります。其間には盛衰もあり、變遷もあります。今これを御話する前に、國文學全體の性質に就いて一言しようと思ひます。凡そ文學には外形と内容とがあります。外にあらはれた形と、内